

---

**おれはまだ本気をだしていないだけ～きっと第2、第3の封印があるっ！...はず。**

ソバット

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

おれはまだ本気をだしてないだけ〜きつと第2、第3の封印があるっ！…はず。

### 【Nコード】

N7407Z

### 【作者名】

ソバット

### 【あらすじ】

おれは無力だ。

だから流されるままに生きる。

でも、信念はある。

『生きることは素晴らしい』と信じること

孤独の海に沈んでいたおれを、人間に絶望しかけていたおれを。

救ってくれたきみが笑っていったことば。

あんなにもきみを突き放したのに…。

きみが一番悲しかったはずなのに。  
それだけは突き通す。

たとえ無様でも。

逃げて、抗って生きてやる。

どんな運命であろうとも。

叶うならきみのようにいきたい。

だけとおれは俺だから……

注：この小説は、魔法少女リリカルなのはの二次創作です

## prologue 聖なる夜に (前書き)

注：この小説は、魔法少女リリカルなのはの二次創作です。  
小説を書くのは初心者です。他の作者の方々に啓蒙された読み専です。  
のでテンプレになるかもしれません。

初心者ですので、小説としての体裁を取れていない部分等、問題点、  
矛盾点が多々含まれると思われます。以上の点は予めご了承ください。  
ただければと思います。

## prologue 聖なる夜に

はぁ・・・。

思わずため息が漏れた。

「ひーろ、どうしたのかな。妹様に言ってみな。」

「うるさい、あんたのほうが年上だろうが。それに俺の妹は1人だけだ。」

この世界にはいないがな…。

「ぐひゃ、ちがうもん。肉体関係はそうだもん。」

「精神的におまえが妹だとは身体が受け入れん。」

町から数キロ離れた海面に、それは傍若無人に鎮座していた。

周囲との調和を完全に無視したその光景は、町の住民が見れば空いた口は塞がらない代物である。

いくら結界が張ってあるとはいえ、この管理外世界 地球で魔法を乱舞させるなんて正気の沙汰とは思えない。管理局的にありだとしても、この国の法律は余裕で破っている。

自分たちの法さえ破ってなければ……それでいいのか管理局う。

コレだから偽善者集団は……、ヘタなカルト教団よりたちが悪い。

その個人の価値を優先する振る舞いに、思わず殺気があふれる  
それでも組織と言えるのだろうか？

そして繁華街のおかしなくらい静かな街中、そこで俺は腕を絡めてくる義妹を適当にあしらいながらため息をつきたくなる。

「それは近親相姦バッチコーいということかな？」

俺が義妹に押し倒されている非常識な事態に陥っているとき、海

面では、常人ごときが想像できる範疇を遥かに超えた非常識が展開されている。

例えるなら、怪獣大決戦。

一方は魔力と物理の複合四層式の防衛プログラムを持つ触手やらなんやらがうようよしている18主に魔法少女系のつくゲームに出てきそうな化物。

肉眼で見れば背筋が凍り付きそうなくらいに不気味だ。

どれくらい不気味かというと・・・カタツムリの殻をつぶしたときくらいか？・・・したことがある人いる？ほんとあれはない。

一方人間はとにかくたくさん。お約束だな。

だがお約束は数だけ。人間側は”質より量”であるべきなのに、

「人間側、強つ。怪獣なむ。」

こういう場合はBランクの魔導師が多数と少数のAランクである  
うに、一人一人がA A A A ニア S ランクは卑怯だ。  
まさにフルボッコ。  
よくあるラスボスの終わり方だねw w

心情は怪獣の味方（笑）をしつつ、だからといって介入するつもりもなく傍観に徹するのは行く意味がないから。  
俺一人が怪獣の味方してもあの戦力差では勝敗が目に見えている。怪我をしている身体じゃ、ねえ。

状況は終始人間側の有利にあつた。

忌々しい守護騎士たちに、彼女達に一步譲るものの十分な実力を兼ね備えたおよそこの小さくなった身体と同年齢の少女たち。

だが、それ以上に目を引くのは、

「・・・能力持ちの転生者か。」  
やはり少女たちと同年齢の二人。

しかしあれはなんだ？



人間の魔力保有臨界点ぎりぎり。  
魔力はうまく高速運用し、痛々しくネタワザを叫びながら触手怪獣をぶっ飛ばす。

『怪獣ー！もつと頑張れww  
18的な感じに引つ張れよー！』  
と同情を禁じえない感じだ。

とにかく人間業じゃない。

放たれる砲撃が空間に干渉するほどの威力は、おそらく現代の技術で作成されるデバイスでは不可能だ。

ロストロギア。おそらくそれだろう。

「やっぱり手伝いいらなかったね。さあ、はやく帰って子作り  
を、ヒロ。」

もう、いいやこいつスルーで。  
「せっかくの聖夜なのに……覚えてないのかな？ヒロ……。」

少女とその2人がトドメとばかりに叫んだ巨砲で怪獣は完全消滅した。

まわり着いてくる義妹を振り払う。

1キロさきの海面から目を放し、俺たちは結界の外へと向かった。

銀細工のリングネックレスを握る。

今の俺の心のよりどころ。

どこか遠いところにいる鳳梨へ、お兄ちゃんは今日も頑張ってるのかいきてます。

ただひとつ望むことは、この変態をどうにかしてほしいです。  
貞操の危機を感じます。

切実に!!

## prologue 聖なる夜に (後書き)

最低1ヶ月に一回は更新できるように頑張ります。

episode 1 & 1 t : 自称妹がかわいいと思えてきた俺はやばい & g t ;

駄作ですがよろしくお願いします。

episode 1 & 1 t : 自称妹がかわいいと思えてきた俺はやばい & g t ;

私立聖祥大付属中学校。

今日はその入学式だ。

まあ、エスカレーター式の進学校だからそこまで特別というわけではないが……。

「ヒロ、今年も同じクラスだといいね。」

はいはい、分かったから。

こいつは皆本 香澄。

自称 妹様の双子の妹になるのかな？……全く似ているようには見えないけど

「……手を離してくれないかな？」

そう、今俺はこいつと手をつないでいるんだ。

タダでさえ白い目で見られるのに、兄妹だと知られた暁にはさらに視線が突き刺さるようになる……余談だが自称妹様はすごいかわいいい

しかし、10年間この状態を保ち続かされてきたおれのスルースキルなら大した問題ではない。

本当だよ！べ、別に最近ふくらんできたうでに当たる慎ましい胸

が気持ちいいなー、とか思っていないからな。

「朝からおあついねー、おふたりさん」

「うざい、去ね。ねーヒロ。」

いや、俺に同意を求められても・・・

俺たちに声を掛けてきたこいつは斑鳩いかるが 良介りょうすけ 自称平凡な人間、絶対に違うと思う。

こいつといるとよく姉妹だと間違えられる。

なぜ俺が妹になる、解せぬ。

「ひどいねー、じゃあ二人とも後でクラスでねー！」  
疾風のように去っていった、朝から元気だよな。

突如、背筋に悪寒が走った。

隣のかすみをのぞき込むと青筋を立てて震えていた。

無表情でそれをやらないでください、かなり怖いんですけど。

「斑鳩、あいつ殺す。ヒロと一緒にのクラスになれるか、1週間ワクワクしていたのに。ば、ばらしやがって・・・」

さいですか、

・・・愛が重い。こいつ。いつからこんなだったのだろうか、

昔はもつと可愛かったよな、純粹で。

良介、なむ。

黒くなっているかすみはスルーで。

これはさすがに俺でもどうにもならない、良介責任を取って死んでくれ。

線香1本くらいはあげるから・・・。

まあ一応、掲示板くらいは見とくか。

おお、あった。

B組

アリサ：～

斑鳩 良介

桂木：～

高町：～

月村：～

フェイト：～

皆本香澄

俺

八神：～

ペガサス  
天馬：～

ふむ、どうやらB組のようだ。  
しかしなんだ、原作キャラ纏められているな。  
まあ、正体がばれなければいいんだけど。  
魔王の砲撃だけは喰らいたくねえし。

で、着きました教室。

知ってる奴いないな。良介はかすみに追いかけられている。

まあ、学校に友だちなんて片手で数えられる程度だけど、だけど・  
。。

基本、広く浅くの関係を望んでいるからな、俺。

あ、良介たちは昔に関係で例外。

原作キャラもまだ着てないようだ。

俺はMyデスクの場所を確認して席に着いた。

場所は窓側の一番後ろ。春の穏やかな日差しが心地いい。

俺は席に着き、鞆からある物を取り出した。

ふむ、朝はこれがないと。

くなのはsideく

今日から新学年!!



わたしは新しい出会いを楽しみにしながら、バスに乗った。

「おい、なのは」

「あ、アリサちゃん!」

「おはよう、なのはちゃん」

「アリサちゃんとすずかちゃん、おはよう」

「おはよ。それにしてもなのは、なんか楽しそうね」

「うん、だって新しいクラスだよ? 楽しみに決まってるよ!」

「いっしょのクラスになれるといいね」

「うん!」

わたしは親友のアリサちゃん、すずかちゃんと共に学校へ向かいま  
した。

「なのはっ」

「フェイトちゃん、おはよう」

学校に着くと、校門前にフェイトちゃんがいました。どうやら、わたし達を待っていてくれたみたいなの。

「さて、クラス分けを見にいきましょう」

アリサちゃんの一声で、私達は学校の掲示板へと向かいました。

「うわっ、人が多いわね…」

「しょうがないよ、新学期なんだし。もう少し早く来ればよかったね。」

掲示板前の人ごみを見て、アリサちゃんは凄く嫌そうな顔をしました。

わたしもあの中に突入する勇氣はないの……。

モーゼのように人混みを分けて掲示板の前に行く変な男女の二人組がいたけど、すごい……でも女の子から出る黒いオーラ、あれは魔力？

「よう、みんな」

と、わたし達が困っていると人ごみから1人の男の子が近づいてきました。

「天馬<sup>てんま</sup>くん、おはよう」

「おはつ、」

天馬君は唐突に話すのをやめてフェイトちゃんの方を向く、またなの。思わずため息が漏れそうになるの。

「フェイトさん、結婚してください!!」

「えええええええ!!?」

「フェイトを困らせんじゃないわよ」「ドゴッ!!」

「ぶぎゃあ!!」

アリサちゃんに殴られた天馬君は、きれいに半円を描いて吹っ飛んだの。

痛そお。

アリサちゃんも手加減しないなあ。

「大丈夫、天馬君?」

「・・・な、なのはすまない・・・」

天馬君は差し出した手に掴まり、なんとか起き上がりました。  
でも『ぶぎゃあー!』って。  
わ、笑っちゃ駄目っ、耐えないとっ。

「……………なのは？」

「なっ、なにっ？」

柔らかな顔でわたしを見つめてくる天馬君。

「あ、あのな「おはよう、なのは（ニコッ）」」

「あ、うん、おはよう」

天馬君のこえは駆け寄ってきた男の子にかき消された。

来たのはアリス君。

キレイな金髪と中世的な顔立ち。  
色の違う不思議な瞳。

向けてきた笑顔は、なんだか絵になります。  
けど、わたしは何故か寒気を感じる。

「なのは、今年は違うクラスだね……………」

「やつ……!!」

「や?どうしたの、なのは?」

「や、やだね?べ、別のクラスなんて」

「そうだね……」

あぶない…。

思わず喜びそうになっちゃった。

アリス君は寂しそうだけど、わたしはちよつと嬉しい。  
だって、アリス君ってちよつと嫌いだから。

「でも、なのはは他の皆と一緒にだから安全だね。僕も昼休みとかはB組に行くから」

「え……。あッ!?うん是非!!」

やっぱ、昼休みも来る気なの…。  
と、わたしが気落ちしていると、天馬君がアリス君に声をかけました。

「なあ、おれは何組だった?」

「なのは、何かあったら呼んでね?直ぐに駆けつけるから」  
「あ、うん」

「なあなあ、だからお」  
「それじゃあ、そろそろ行くね?また後で」  
「」

アリス君はそう言って、校舎へと歩いていった。  
無視されていた天馬君は、無表情で「もう慣れたけどな」と笑っている。

天馬君から少し黒いオーラが流れている、天馬君かわいそうなの。  
そういうところが嫌なんだけど？アリス君。

わたし達はクラス分けを見に行かず、教室へ向かった。

天馬君はクラス分けを見に行くらしい、人混みに飛び込んでいった。  
わたし達が確認しに行かないのは、単にネタバレされたから。  
他の皆も不満そうな顔をしている。

そうだよな。クラス分け確認するのも楽しみだったんだもんね。

「で、でも、またみんな同じクラスでよかったよ！」

場の空気に耐えられなかったのか、フェイトちゃんがわたし達に言った。

「そうだね、みんな1年間よろしくね」

「そうね、こんな空気じゃやってられないわ。みんな、またよろし

く

「うん、また楽しい1年になるよ、きっと!」

私達は新たな1年に期待を寄せて、教室へと向かった。

「…そういえばはやてちゃんは何処に行ったんだろ?」

## episode 2 〈俺の華麗なる朝〉

「桂木の敵を討たせてもらうよ、この凶剣斧【白雨】で」

「あんたはあん時の！」

ビクツと体をふるわせる狸。

「なんと、今思い出すとは！」

俺はそんな思考が鈍った彼女を見、更に怒りを爆発させた。

「やっぱり、俺と貴様は運命の赤い糸で結ばれていたようだ。――

―復讐と言っな・・・」

今、確信した。

「闘う運命にあった！」

全身の体重を乗せて振られた漆黒爪【終焉】をバックステップで避けたおれは、あわてて体重を戻そうとする子狸を凶剣斧【白雨】でなぎ払う。

「ぐはっ！」

「ようやく理解した！」



俺の攻撃は都合良く止ませはしない。一気に攻め立てようと小狸の胴を両断するため、袈裟斬りに戦斧を走らせる。

それをただ待つほど小狸も愚かじゃない。バックラーで受け止める。

「俺は貴様の圧倒的卑劣さに堪忍袋の緒が切れた!」

火花の如く散る視線の中で俺は宣言する。

「この気持ち　まさしく……にくしみだ。

――だが、俺は考えた。もし貴様が今この素材を剥ぎ取らせてくれたら許してやらないでもない――と」

「そんな提案をしておきながら!」

吼えよ、子狸。

「なぜ戦う!?!」

今度は子狸が間合いをつめ、すかさず剣を振るう。

「ふっ、」

、が俺はそれをやすやすと受け流す。

「”ロリコン”に戦いの意味を問うとは――愚か。ナンセンスだな  
！」

「貴様は歪んでいる」

「俺は悪くねえっ！ 先生がやれって言ったんだ。そうだ！先生が  
悪いんだ――！」

俺にロリイのよさを教えた先生がわるいんだ！」

「むねに貴賤はなしやで」

「そ、それは世界の声だよ！でも

――ろりこそ至高だ」

「嘘だっ！」

八神はやて  
子狸が言ってることは詭弁だ。

腰を早くバンギス装備にしたい次いでに戦いたいという欲望を正当  
化するための虚言にすぎない。

「あんたは自分の欲望を押し通しているだけだ！のその歪み、この  
わたしが断ち斬るッ！」

「よく言った子狸――！」

お互い距離を取って様子を伺うだけであつたが、俺の咆哮を皮切り

に、俺たちは同時に畳を蹴った。

「うおおおおおっ！」

「やあああああっ！」

喉を引き裂かんばかりの怒声が轟き、己の剣を振り下ろそうとする。

が、それよりも早く

クエストが終了した。

俺たちは目の前が真っ暗になった。



episode 2 《俺の華麗なる朝》（後書き）

へんなテンションで書いてほんとすいません。

モンハン、ギャンダムその他もろもろ適当に混ぜています。

桂木というのは転生者でとある落とし神の物語とは関係あるかは、紙のみぞ知る。

作者に余裕があつたら番外編のほうに乗せたいです。

感想などをいただけたら嬉しいです。

## episode 3 〈俺の華麗なる朝〉 2

〔 N a n o h a   s i d e 〕

あ…ありのまま　今　起こった話を話すね！

「わたしは何事もなく自分の席に着いたと思ったら隣にいままでいなかったはやてちゃんと、知らない男の子が2人溶けていた。」

な…　何を言っているのか　わからないと思うけど。

わたしも　何が起こったのか　わからなかった…

頭がどうにかなりそうだった…　夢や幻想だとか

そんなチャチなもんじゃあ　断じてない。

もっと恐ろしいものの片鱗を　味わったの…

…

…

…

…これどうしようっ？

誰か呼ぶべきかな。

ピクッピクッ。

なんかピクツピクうごいてるよ、これ。  
ー気持ちわるっ！

失礼かもしれないけどこれはきもいつ。

でも何故か目が放せない。  
これどうなってるんだろ？

触つてみようかな・・・。  
いやいやいや、チョット待て。  
触つて大丈夫なのかな？  
なんか膨れあがってきてるし。  
ん？膨れあがって？

＼主人公 side＼

うう、くそ。

狸め。

平等にはぎ取るって約束したのに。  
裏切りやがって・・・。

まあ、そろそろ起きようか。

あと1回くらいトライできるだろ。

おれのアバターふうちゃんに暴食竜を装備させるんだ。

それにしてもこのモン ターハンター！。

アバター設定。身長とか体型とかももっと設定させてくれないかな。

足は太いし、腰太いし。

俺としてはもっとスレンダーでちっちゃい方が・・・。

体をあげる。

ん？

サイドテールでネコ目の美少女がいた。

目の前に、その距離およそ5センチ。

「ぎゃあああああー」

「きゃあ。」

神様、仏様、シュテル様。

どうかお許し下さい。



別に下心が会ったわけではないんですよ。

ただ顔を上げたらまたまこうなっただけで。

故意ではないんですよ。

即座に俺は土下座を実行した。

『きゃあ？』

いつもなら顔を真っ赤に怒らせて砲撃を放ってくるのに？

おかしい。

こんな所にいるのはあり得ないとまでは言えないがおかしい。

ここは中学校。

私立聖祥大付属中学校。

ま・・・まさか。

そこにいたのは。

オリジナル。原作キャラ。

主人公、砲撃魔 高町なのはだった。

いや待て、まだ大丈夫だ。

別になんにもばれちゃいない。

でも、この状況どうしようか。

俺が叫んだモンだから周りの注目を集めている。

片や美少女、片や女顔のフツメン。

やばいな、絶対おれがなんかしたと思われる。

世界は平等とか言ってもなんだかねで外見で差別される。  
つまり見た目で判断される。

俺が悪いとされるのだ。

入学早々災厄のスタートだ。

逃げようか、よし逃げよう。

50メートル6・1の俺の足なら逃げ切れるはず!!

しかし俺が教室から出ることはなかった。

**episode 4〈俺の華麗なる朝〉 3 (前書き)**

投稿しますた。

2012/01/04

## episode 4 〈俺の華麗なる朝〉 3

〈放課後〉

そう放課後である。

あれからどうしたかって？

まあ、ただ。

なのは（暫定）の悲鳴をきいて駆けつけた金髪の美少女「……えっと、ばーにんぐ？ だったかー」が全力逃走している俺の袖をひいた。

俺は足を滑らせてこけた。

打ち所が悪かったのか気を失った。

クラスメイトが保健室へ搬送。

目を覚ますと入学式もLHR終了。

原作キャラと思われる集団が謝罪に。

別にいいよといい、やんわりと帰るようにすすめるが食い下がらない。

そのとき保健室の扉がバンといきおいよく開けた、俺はこれからおきる面倒ごとに頭を抱える。

すごい形相の香澄が俺に飛び込んできた。

俺は妹をたしなめた、原作キヤラー同はほつけた顔に。

妹は回りに気づく、そして金髪美少女ぱーにんぐ？を見て顔をゆがめる。

殴りかかろうとする香澄、事前にそれを予知していた俺は阻止。

どいて、ヒロ。そいつが殺せない！！

仕方なく身長130cm台の小学生にしか見えない暴れるちいさな

妹様を小脇に抱える。

とても香澄を抑えられないので、そのままダッシュ。  
呆然とする原作キャラクター同。

校内を歩きながら、帰途につく。      今ここ

「ヒロ、なんであいつ殺しちゃいけないの？ヒロをきずものにしたのに。」

「こんなところで殺しはまずいだろ、絶対むやみやたらに殺すなよ。」

「でもヒロ。」

「でもない。それにあいつら原作キャラなんだろ、確信ないけど。」

「うんそうだよ。一人、イレギュラー余分なのがいたけど……。」

やっぱりあの中にいたか、イレギュラー。  
どんな能力を持っているのだろうか……。

今まであった転生者イレギュラーは戦闘系、生産系と差異こそあれ何らか

の能力が与えられていた。

……くそ、俺も欲しい。

とにかく転生者<sup>俺以外</sup>は総じてみなスペックが規格外だ。

計画のじゃまにならなければいいがな。

「殺しちゃだめ？」

「っ、だめだよ。というか何でそんなに殺したがるんだよ。」

「わたしのヒロの害になるかもしれないから……。」

だめだこいつ早く何とかしないと。

「強いかもしれないし、仲間になるかもしれないだろ。」

「……そうだけど。じゃあ、アリサ・バニングスは殺していいよね。」

「

だれ??

「誰、アリサ・バニングスって。」

「ヒロ殴ったぶれいもの。」

ああ、原作キャラか。確かそんなのいたな。  
最近記憶があいまいだな……。

「だめだよ、原作キャラだめっていつてるじゃん。」



「でも、あいつ。2期以降モブだし、出番ないし。作品によってはレイプとかされてそろそろ脱落するキャラだよ。」

「いやいや、それでもだめだろ。」

「それに脱落？死ぬのか？あいつ。」

「まあ、その辺は自称正義の味方イレギュラーたちがどうにかするだろ。」

「だめだ、原作キャラだろ。」

「じゃあ、よぶんなのをけしてくるねw」

「だからだめだつて。」

「話し通じねえ。」

「無限ループだよ。」

「こいつほんとどうしてこうなった。そんなに誰か殺したいのか？」

「教育間違ってたかな？」



## episode 5 《俺の平凡な日常》

桜咲くこの季節。

心機一転。何かを始めたりするのにちょうどいい季節。

小学生と中学生、入学したばかりの俺たちにとっては大して違いは無いが進学するとその世界観は否応なしに大きく変わる。

特に新入生はこの時期何かと忙しい。

私立聖祥大付属中学校。

大学にも繋がるマンモス校だ。

中学生から部活に熱を入れる者も非常に多い。

入部は強制ではないが、手芸は文芸も体育系も豊富。

部活自体人数が5人以上いれば承認されるため訳の分からない分も非常に多い。

なんでも過去の生徒会がマニフェストを実行した結果らしいが、よくは知らない。

――唐突に何故こんな事を話したかというと。

勧誘が凄まじいのだ。

特に体育会系。

マイナーな競技や、マイナーな武術同好会など。

メジャーな競技だったり、文化系の部活だったりしたら割とかんたんに部員が集まるのだが。

つまり必死に勧誘しないと誰も入ってくれないのだ。

勧誘を避けながらだるそうに歩いていると、隣を歩く香澄（妹様）が話し掛けてきた。

「ヒロは部活にはいるの？」

「・・・急にどした？」

「いや、なんとなく。みんな何処に入ろうか話してたから。」

「で。俺が入るとしたら何処にはいるのだろうか、と。」

「うん」

小首をかわいらしくかしげる香澄。

「テニス部かな？」

「そう言えばヒロは前、やってたんだよね。」

「ああ、といっても弱かったがな。才能ないし。」

というかテニスは最も技術が必要な競技だと俺は思うんだ。

「香澄はどうなんだ。」

「私は手芸部かな」

手芸部か。

なかなか似合っているとは思うがもっと運動的な部活が好みだと思っただが。

「この学校の手芸部すごいらしいんだ。」

なんでもこの辺の掃除を担当しているんだって。」

…掃除？

「掃除って何だ。」

手芸部って裁縫とかする部ではないの。」

「うん、それもあるけど。」

夜の町に駆け出して社会のゴミを狩るんだって。部員はなにかの武術を納めているらしいよ。」

なにそれ怖い。

なんか進学校の闇を見た気がする。

「「まあ」「

「俺たち（私たち）は部活なんかはいれないけど。忙しいし。」

渴いた笑いしか出てこない。

せっかくの二回目の青春なのに仕事だけで終えてしまうなんて。

もつとも時間があつたとしても、いまさらスポーツなんて楽しめないだろうが。

根本的な肉体のスペックが違いすぎる。

なんか変わってしまったことを改めて実感してしまい少し悲しくなる。

まあ、今日も1日がんばろうか…。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7407z/>

---

おれはまだ本気をだしていないだけ～きっと第2、第3の封印があるっ！...は

2012年1月14日20時58分発行